

<「知るっば!久留米」 令和3年4月15日(木) 12:30~放送分>

からくり儀右衛門

～第3回～ 「からくり儀右衛門が暮らしを変えた 大坂・京都編」

<ゲスト：久留米市文化財保護課 小澤太郎さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、久留米が生んだ発明王『からくり儀右衛門(ぎえもん)』をテーマにお送りしています。

ゲストはこのかたです。

ゲスト:小澤太郎さん(以下「小澤」)

久留米市文化財保護課の小澤太郎です。

よろしくお願いします。

坂本 第3回のテーマは『からくり儀右衛門が暮らしを変えた 大坂・京都編』です。

田中久重は、36歳で家族を連れて関西に移住しています。

どんなきっかけがあったのでしょうか？

小澤 やはり長期間に渡る関西方面での「からくり興行」で、

大坂や京都の人々の暮らしをつぶさに見てきたことが大きかったのではないかと思います。

移住後もからくり人形を制作していますが、

主に暮らしに役立つ道具類の製造販売を手掛けています。

恐らく、人々を楽しませるエンターテインメント追及路線から、

人々の生活そのものを便利にしたいと思うようになったのでしょう。

坂本 どんなものを作ったのですか？

小澤 最初のヒット商品は、「懐中燭台(かいちゅうしょくだい)」ですね。

これは、小さく折りたためる蠟燭立(ろうそくたて)です。

蠟燭は、江戸時代の代表的な照明ですよ。

坂本 それを折りたためるようにしたということは、今でいうモバイルですか？

小澤 袖の中にも入る大きさになっています。

例えば、夜間往診するお医者さんや、帳簿を付ける町人、旅人などにとって、

コンパクトにできる蠟燭立は、重宝されたそうですよ。大坂時代の大ヒット作です。

坂本 まさに消費者目線の発明ですね。
大坂でのスタートは、順風満帆だったということでしょうか？

小澤 いえいえ。実は、移住3年目に大坂で大事件が起こりました。
それが、大塩平八郎の乱です。
その時に大坂市中の5分の1が焼失してしまい、久重の自宅も焼失したそうです。
それで、京都に移住することになったんです。

坂本 まさに、逆境下でも不屈の精神というやつですね。
京都では、どのような発明をされたのですか？

小澤 照明器具がバージョンアップして、「無尽灯（むじんとう）」を開発しています。

坂本 照明にこだわっているようですが、今度は無尽灯？

小澤 無尽灯、漢字で書くと「尽（つ）きることが無い灯り」ですね。
当時の照明器具は、さっき出てきた蠟燭や行灯（あんどん）です。
蠟燭は燃え尽きたら消えるし、行灯も小皿の油がなくなったら、継ぎ足さなくてははいけません。
無尽灯は、ポンプで空気圧を利用して、下にある菜種油を入れるタンクから明かりの芯に
給油し続けるので、タンク内の油がなくなるまで油を継ぎ足す手間がいりません。
しかも、点灯実験の結果を見ると、明るさは蠟燭の10倍ほどあるそうです。
ガラス製のホヤが付くので、風の影響を受けず、炎がチラつきません。

坂本 ホヤとはカバーのことですね。
今でも停電の時には蠟燭を使いますが、暗いですし、炎がチラついたりもしますよね。
当時はカバーを付けたことで、明かりが安定したということですね。

小澤 これが、関西の商人を中心に大ヒットでした。
昼間は商いをして、夜に帳簿を付けるんですが、帳簿付けが楽なんですって。
幕末の関西地方に「照明革命」を起こしたと言えるでしょうね。

坂本 夜更かしの歴史が、儀右衛門さんの発明から始まったってことでしょうね。
他に何か発明品はありますか？

小澤 実は、すごいものがあるんですよ。
みなさんも聞いたことがあると思いますが、「万年時計（まんねんどけい）」です。

坂本 万年時計？

小澤 我々が普段使っている時計は定時法で、1時間の長さが決まっています、
年中それは変わらないですよ。
江戸時代は、不定時法といって、1時間の長さが昼と夜、季節によって変わったりするんですよ。
万年時計は、この定時法の西洋時計と不定時法の和時計を連動させているんです。
そして、それだけではないんですよ。
万年時計には7面あって、この他にも曜日や十干十二支（じっかんじゅうにし）、日付の表示、
月の満ち欠け、太陽と月の動きを示す天球儀などが、
一度「ぜんまい」を巻くと正確に連動するんです。

坂本 スマホやパソコンで色々な情報を集めるような感じなのかな？
どういう仕組みになっているんですか？

小澤 私の口からはなかなか説明しづらいのですが、2004年に分解調査が行われました。
その際に、時計の専門家でも見たこともない部品が使われていて驚嘆したそうです。
また、もうひとつ驚くのが、完成までのスピードなんですよ。
この時計を作るために、学者さんの下で天文学や数学を基礎から学んでいるんです。
昼間はカラクリ堂で仕事をして、閉店後に片道一時間以上を徒歩で通っているんです。
そして、入門から4年後には万年時計が完成しているという驚きの集中力です。

坂本 それはすごいですね。

小澤 また、50歳を過ぎても飽き足らず、蘭学塾に入門しています。

坂本 探求心というか、勉強に対する意欲がすごいですね。

小澤 儀右衛門さんには、やりたい具体的な目標があったようなんですが、それが「蒸気機関」です。
蒸気機関は、当時、ワットが発明して、ヨーロッパに産業革命を起こした動力です。

坂本 当時の最先端技術ですよ。

小澤 実物の蒸気機関が日本にないまま、西洋の技術書や設計図から学んで、
なんと、万年時計完成の翌年には、蒸気機関の小型版を完成させたいです。

坂本 万年時計の制作と蒸気機関の研究は、並行してやっていたわけですか？

小澤 だから、昼間は万年時計を作って、夜は蒸気機関の研究をしていたのかもしれないね。
蒸気船の模型を作って、関白鷹司（たかつかさ）邸での試験運転に成功したことで、
関白様から「日本第一細工師」の称号をいただいたそうです。
名実ともに、日本一の西洋技術者としての第一歩を踏み出したわけです。

坂本 なるほど。人々の生活に密着した発明にだんだん移行して、
産業の先端を走るようになっていったということですね。
お時間が来たようでございます。
文化財保護課の小澤太郎さん、興味深いお話をありがとうございました。
次回は、からくり儀右衛門こと田中久重が、佐賀、さらには久留米に戻って活躍したお話です。
おたのしみに。